

Title	序：「自由の問題」に焦点を合わせて：聖学院大学総合研究所十年とこれから
Author(s)	大木, 英夫
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.15, 1999.3 : 3-4
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3434
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

序——「自由の問題」に焦点を合わせて行く

聖学院大学総合研究所十年とこれから

過去十年間、聖学院大学総合研究所は、「自由の問題」に焦点を合わせてきた。これからもそこに焦点を合わせて行く。モダナイゼーションとは基本的に自由化である。それは幾多の逆流や屈折を経て、この世紀末にその動向の形をはっきりと現し出した。これから、第三ミレニアムにおいての永続的なそして深刻な問題は、自由の問題であるに違いない。人類はそれを享樂しまたそれに苦惱するであろう。二十世紀に右肩あがり急騰した科学技術の進歩、医学医術の発展、フリー・フェア・グローバルという金融のグローバルイゼーション、産業におけるヴェンチャーと自由競争、優勝劣敗の苛酷な現実、貿易の自由化、都市化、移住の自由は今や宇宙にまで至る。それらすべての変化の根底にあるのは、自由化であり、そして問題は自由である。

それは深く哲学的、神学的問題である。最近WTOの人と話した。自由化のもたらす諸問題への対応は確かに考えられている。セイフティ・ネットは幾重にも考慮されている。しかし、国家利害を超えるグローバル・ガヴァナンスが出来ていない。またどうそれをグローバルに運営行使するか。——たしかに国家の利害のためにそこから脱退もできる。しかし、なぜ中国まで入ろうとするのか。グローバルな権威、権力の所在が不明確な状況で、WTOはその存在理由を、

自由化がトレンドであるという一種の歴史哲学的な原理をもって、そのメリットを説得して回るしかないようである。——この問題を通つ込んで行けば、深く哲学的、神学的問題の層に突き当たる。本研究所は、日本の知的社会に先んじて、過去三年間「市民社会と国家の役割」の研究活動をしてきた。その成果の一端がここにも掲載されている。

自由の問題との格闘は、人類の知性の企てる巨人的格闘となるであろう。安易な解決が不可能であることは、一九八九年、今から十年前の東欧の事件が永続的教訓となつて行く。この深刻な問題と取り組むことが、今日の知性の運命となると思う。今日の知的愛は、その運命を愛すること (amor fati) でもあろう。あの十八、十九世紀の単純な自由謳歌、理性讚美を、二十世紀はその現実をもって反駁したではないか。しかし、それでも自由化は進行し、新しい世紀へとその動きは激化する。自由化は、「自由の問題」という排気ガスを出して加速して行く。第三ミレニアムは人類の比類なき悲惨の予感をすでに嵩じさせている。環境問題、医療問題、福祉問題にそれがすでに現れている。

なぜか。自由の中に、神学的に言えば、罪が伏在、いや顕在しているからである。自由の増大が罪の増大となるからである。かならずや人類は、自由化のはて、罪の跳梁になやみ、そして救済の問題に直面することになる。人間の本性に潜む問題を、自由化が顕在化させて行く。だからこれからの知性は、その問題に取り組まねばならない。それが知性の運命だからである。この研究所は、第三ミレニアムに向かって引き続き、「自由の問題」にはっきり焦点を合わせに行く。そこから社会現象をトータルに見、ラディカルに取り組むことができるからである。

一九九九年二月二二日

聖学院大学総合研究所長 大木 英夫